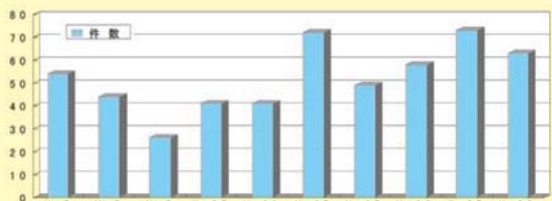


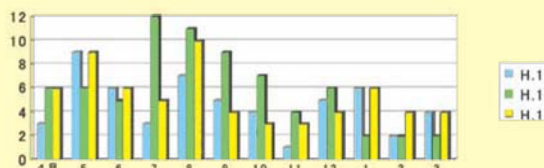
これは保健室でのデータ集計と平成16年7月に生徒が行った安全意識調査のまとめである。調査方法は生徒会保健部の生徒がアンケート用紙を作成し、全校生徒に対し調査を行った。膨大なデータをまとめるという大変な作業になったが、そこから見えてくる色々な生徒の意識を確認することができ、その後の手引書作成に大いに役立った。

1. 年度推移



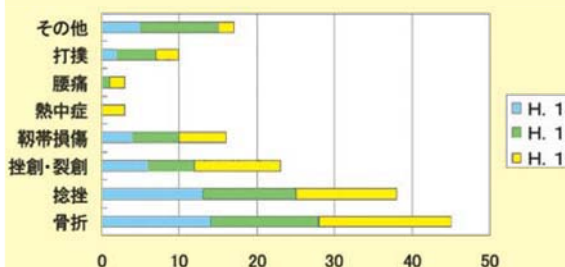
15年度は過去最高で73件、次が12年度で72件、この過去5年間は50件を越える傾向にある。

2. 月別発生件数 (H.14~H.16)



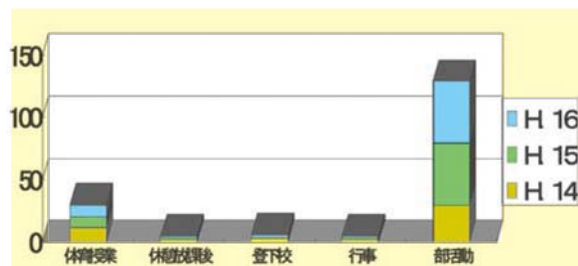
月別では、5月から10月までのスポーツシーズンに災害が多い。特に夏休み中の部活動でのケガが目立つ。

3. 傷病別



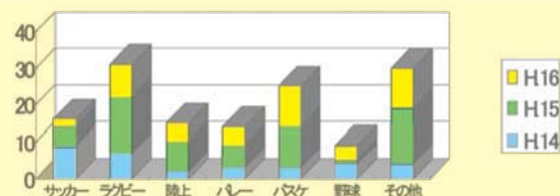
過去3年とも骨折が最も多く、次いで捻挫、挫創・裂創などになっている。16年度は暑さのためか熱中症ができた。今年度も要注意。

4. 発生場合別



場合別では、部活動中のケガが圧倒的に多く、7~8割を占め、次が体育の授業である。

5. 発生場合(部活動)別



*その他にはスキー、ハンド、テニス、柔道、バドミントン、スケート、体操、剣道など
部活動別ではラグビーが最も多く、次いでバスケ、サッカー、陸上、バレーなどが多い。球技では、ボールそのものによる事故より、ジャンプや相手との接触によりバランスを崩してケガをするケースが目立つ。

(2) 調査結果

平成16年9月の学校祭発表は校内掲示という形であったが、興味深く発表内容を読む生徒が多く関心の高さをうかがうことができた。



学校保健委員会での発表の様子



この調査結果からわかる傾向は、次のようになる。

- 1 どの項目も男女差が見られない。
- 2 ケガには行動に大きな原因があると答えた人が多い。
- 3 ケガを避ける方法として運動前後のウォーミングアップやクールダウンなどで自分の体をケアすることを考えている人が多い。
- 4 ケガをしてしまったり、ケガをするおそれがあっても運動は継続したいという人が多い。

この報告を通して、本校における災害傾向について共通理解を図ることができた。

3 手引き書「運動部活動の安全な指導のために」作成と活用

(1) ねらい

学校安全研究推進事業委員会では、上記のような高校生の安全意識を踏まえながら、「運動部活動の安全な指導のために」という手引き書を作成し、安全なスポーツ活動、スポーツ指導が行えるようにすることがねらいである。

(2) 内容構成

- ア 活動計画立案上の安全対策
- イ 活動上・指導上の安全対策
- ウ 施設・用具の安全管理
- エ その他の安全対策と問題点
- オ 事故例と原因分析

(3) 具体例（サッカー部）

上記の5項目を、本校の中心的運動部活動である19の部（陸上競技・器械体操・野球・ソフトテニス・卓球・バドミントン・バスケットボール・バレーボール・サッカー・ラグビーフットボール・ハンドボール・柔道・剣道・弓道・山岳・水泳・スキー・スケート・空手道）が編集し、全体の安全意識高揚の始まりとなっている。その中からサッカー部の例を簡単（約半分程度の内容に抑えて）に紹介する。

ア 活動計画立案上の安全対策

サッカー競技は、他のスポーツとは異なり手を使うことがほとんどなく、日常的にあまり使用されない足や頭を主として、身体のあらゆる部位を用いて行う競技である。グラウンドにおいて22名が一つのボールを巡って激しい攻防を行うため、

身体の接触、衝突が頻繁にみうけられ、そこには常に事故の可能性が存在する。日頃から部員の事故の未然防止や安全に対する意識を高めるための指導を心がけなければならない。

イ 活動上・指導上の安全対策

(ア) 平常時の活動

① 練習上の安全対策

- ・ ウォーミングアップの際は、特にストレッチ運動を十分に行う。
- ・ 練習中は多量の発汗を伴うので、水の補給を随時行う。

② 指導上の安全対策

- ・ 技術習得上の漸進性を考慮に入れて、段階を追った練習を行う。
- ・ 練習内容は次の段階の練習を助長するような系統性のある内容を配列する。
- ・ 体調不良、疲労蓄積、注意力の散漫から事故が発生する場合が多い。日頃より、生徒の健康チェックを行う。
- ・ 週間、月間、年間の練習にリズムをつけ、目標を持たせて行う。
- ・ 炎暑、寒冷、雨、雪等の気象条件への対応を講じる。



(イ) 休業時の活動

- ① 特に夏季休業中の練習日や合宿・遠征の日程調整に配慮する。
 - ② 炎天下での練習はなるべく避けて、熱中症等への対策を講じる。
 - ③ 水分の補給を十分行うとともに、途中休憩を入れる。
- (ウ) 合宿中の活動
- ① 規則正しい生活を送る。
 - ② 栄養の摂取に配慮する。
- (エ) 対外試合時の活動
- ① 練習試合を計画する際は、本校チームの実力や対戦相手チームの実力を考慮し企画する。

- ② ルールの理解不足から生じる事故をなくす。
- ③ 練習試合でもできるだけ公認審判員によるゲームを行う。

ウ 施設・用具の安全管理

(ア) 施設安全点検・管理

- ① グラウンドに石やガラスの破片、金属片が落ちていないか点検する。また、グラウンドの表面が極端に硬かったり、柔らかくなっていないか。また、凹凸はないか等も常に点検する。
- ② 地面に埋没してある各種表示物を点検する。
- ③ ゴール設置周辺は整然と片付けられているか点検する。

(イ) シューズ・服装・テーピング等の使用による安全対策

- ① 適切なスタッドが付いているか。靴紐が極端に長くないか確認する。
- ② ゴールキーパーは、相手との接触やスライディングが多いので長袖を着用させる。また、強烈なシュートを受けることが多く、手指の保護のため、テーピングをした上で手袋をさせる。

エ その他の安全対策と問題点

- (ア) ウェイトトレーニングは競技力の向上や事故の防止の面から重要である。間違った方法で行うとかえって身体各部に損傷を与えてしまう。負荷のかけ方やフォーム等、正しい方法を身に付けさせ計画的に実施することが重要である。
- (イ) テーピング、バンテージの有効性を指導し、正しい使用法を身に付けさせる。

- (ウ) ルールを理解することによって事故を防げる場合が多い。紅白試合などの審判ができるように審判法を身に付けさせる。在学中に日本サッカー協会公認4級審判を取得させたい。

オ 事故例と原因分析

(ア) 事故例

足関節の捻挫が圧倒的に多いが、膝関節の側副靭帯損傷、十字靭帯損傷、骨折、肉離れもみられる。また、空中での競い合いの際のバッティングによる頭部、顔部への損傷や歯牙損傷もある。

(イ) 原因

グラウンド地表面の硬化、練習環境の不備、不可抗力的なもの、身体バランスの欠如、筋力不足、注意力散漫、体調不良、疲労の蓄積、トレーニングの量や内容の不適、ルールの無知、審判員の未熟、スポーツマンシップの欠如等がある。

(4) 配布

このような過程を経て作成された「運動部活動の安全な指導のために」という手引書を山形県内の全高等学校(含私立)へ配布した。各校で参考にしていただき色々ご意見をいただくなど、手引書の内容充実努めた。

(5) 研修会

平成17年6月に学校安全研究推進事業研修会を開催し、各運動部顧問による手引書「運動部活動の安全な指導のために」の説明と保健部による「本校のケガの状況」の説明を行った。ケガの発生状況や予防についての共通理解が図られた。さらに、事故を防止するための安全意識も今まで以上に強まった。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 安全に関する意識調査をしたことにより、生徒の安全に対する意識を把握することができた。また、そのことにより生徒自身がケガに対する予防と安全に対する意識を日常生活からの中でも高めることができた。
- (2) 手引き書「運動部活動の安全な指導のために」を作成したことにより、指導者の安全指導と安全教育を今まで以上に徹底することができた。生徒とかかわる実際の指導の場面でも「いのちの大切さ」を意識することができた。
- (3) 「施設安全委員会」を複数の校務分掌から組織することで、「学校における安全」の諸問題を、関係機関の連携のもとで検討することができた。

2 今後の課題

- (1) 「安全に関する意識調査」は、今後も行い、生徒の安全に対する意識の高揚につなげたい。
- (2) 手引き書「運動部活動の安全な指導のために」の活用を今後とも図るとともに、他の教育機関とも連携を図りながら改善を図りたい。
- (3) 「いのち」を大切にす教育を根底にした安全教育と安全指導の充実が図られるよう「施設安全委員会」を中心とした組織体制を推進していきたい。地域や家庭においても「いのち」を大切にす意識が持てるよう連携を強めていきたい。

